

# 『散文トリスタン』におけるパラメード のエピソードと伝統的トリスタン物語

太 古 隆 治

13世紀前半、それまで韻文で伝えられていたトリスタン物語を散文に書き改め、さらに数限り無い物語を織り込んだ混合作品、『散文トリスタン』が誕生し一世を風靡した。この作品は、伝統的トリスタン物語には見られない、極めて特異な登場人物を幾人も生み出しているのだが、そのような登場人物の一人パラメードは、作品への導入のされ方においてまことに興味深い問題を我々に呈示している。というのも、この人物は、『散文トリスタン』の作者独自の構想から生まれてはいるものの、伝統的トリスタン物語との関係を抜きにしては語れないからである。本論はこの登場人物が現われる最初の二つのエピソードを対象とし、その両エピソードが伝統的エピソードに対してどのような対応をなしているかの問題に焦点を絞る。パラメードのエピソードと伝統的トリスタン物語との関係の問題を扱った研究は少なくはないが、本論はそれらの研究をふるいにかけて問題の再検討を試みる。

『散文トリスタン』に関する最も新しい研究を著わしたボームガルトネル女史は、その著作の「トリスタン伝説の韻文版と『散文トリスタン』」と題した章で次のように述べている。

『散文トリスタン』の前半部、主人公の誕生から白い手のイゾーとの結婚までは、諸エピソードの連関に本質的な変更を加えることなく、トリスタン伝説流布本の、また部分的にはあるがトマの騎士道本の、劇構造を再現している。(p. 101)<sup>1)</sup>

パラメードという新しい登場人物が『散文トリスタン』に導入されているのは、

この「主人公の誕生から白い手のイズーまで」の部分、即ち『散文』がこの伝説の伝統的所与を最も忠実に残している部分においてである。

本論の趣旨はパラメード導入によって『散文』がこの伝統的所与にどのような対応を示しているかを検討することにある。だがその前に、この登場人物が物語にどのような係わりを持って現われるかを見てみよう。

まず作者は、実際にパラメードを登場させる前に、この名で呼ばれる人物に二度にわたって言及する。「モルオーとの決闘」のエピソードの少し前で、作者はトリスタンとその従者の間に将来起こるであろう不慮の出来事を予告し、そのついでにパラメードについて触れる。

その後、トリスタンは、聖杯探求の途上、良きサラセン人パラメードを追っていたその時に、誤って彼（従者）を殺してしまった。この話については、我々の書物において時と所がやってきたときに、すっかりお話しましょう。（カーティス版 I, § 284）<sup>2)</sup>

上の予告の後しばらくして、作者はこれとほぼ同じ内容の予告を再び行なうが、ここでは最初の予告の「良きサラセン人パラメード」に少し説明を加え、「奥方イズーをかくも愛していたサラセンの良き騎士パラメード」（カーティス版 I, § 323）としている。

パラメードが実際に物語の中に初登場するのは、我々が「ランドの野試合」と呼ぶエピソード（カーティス版 I, §§ 316-339）においてである。モルオーとの決闘の後、彼の毒塗りの剣によって負わされた傷を癒すことのできる地を求めてトリスタンは単身海に乗り出し、死んだモルオーの国アイルランドに漂着する。トリスタンは素姓を隠したままアイルランド王の宮廷でイズーの看護を受け、健康を取り戻す。その頃、野試合が催されるが、彼は健康上の理由で出場を辞退する。ランド城の前で開かれ、並みいる円卓の騎士が参加したその野試合に、二本の剣と黒い楯の騎士が現われ、他を圧倒して最高殊勲者となる。この人物がパラメードである。この野試合の勇者は、アイルランド王に招かれ宮廷でイズーを眼にするや、たちまち彼女に恋をし、この人を得るためならサラセンの教えも捨てようともまで考える。トリスタンはパラメードのこの様子を見て初めて一人の女性としてのイズーの存在に気づき、彼に強い対抗意

識を抱く。パラメードもまたトリスタンに恋の敵対者を見出し、かくしてイズーがそれと気づかぬうちに二人の騎士の間には「運命的な憎しみ」が生まれる。しかし、トリスタンはその後再び開かれた野試合でパラメードを打ち負かし、敗れたパラメードは屈辱のうちに姿を消す。

パラメードが再び登場するのは「イズー誘拐」のエピソード（カーティス版Ⅱ， §§ 490—512）においてである。

イズーは、マルク王のもとに嫁いだ後しばらくして、トリスタンとの不倫の仲が発覚するのを恐れるあまり、二人の奴隷に命じて彼女の忠実な侍女ブランジェンを森で殺害させようと企む。ところが奴隷はブランジェンに同情して命は助け、木に縛りつけて森に置き去りにする。そこに一人の騎士が偶然通りがかり、ブランジェンを解放する。それがパラメードである。彼は、ブランジェンが既にこの世にはないものと信じ後悔しているイズーに、ブランジェンは生きていますと告げ、イズーのもとに彼女を連れ帰ることを誓う。その代償にイズーは彼に何なりと望みを適えようと約束する。パラメードは誓いを果すとマルク王のもとに行き、後の約束を王自ら保証するよう請う。そうして、王がそれを受け入れると、彼は代償としてほかならぬ後のイズーを要求する。王は自らの誓いに縛られてイズーを引き渡すことを余儀なくされ、パラメードは堂々とイズーを攫って立ち去る。……………

以上二つのエピソードのうち後のものは古くから論議的になってきた。

最初に、レーゼット<sup>3)</sup>続いてベディエ<sup>4)</sup>がこのエピソードをトマ即ち騎士道本で語られているアイルランドのハーブ弾きの話、いわゆる「ハーブとロート」のエピソードに相当するものと考えた。実際、両エピソードとも「ブランジェン」（イズーによるブランジェン抹殺の企て）のすぐ次に語られていることのほかに、内容的にも多くの共通する要素を備えている。その共通項を繋ぎ合わせると次のような物語が得られる。

トリスタンが狩に出て不在の折、以前からイズーに思いを寄せていた一人の騎士がマルク王の宮廷に現われ、彼の奉仕に対して何なりと望みのものを与えるとのマルク王の誓いを楯に取って後のイズーを要求する。騎士の正当な権利に対して異議のある者は一騎打ちによる裁きに訴えることができる。しかし、王にも彼の家臣にも騎士に挑むだけの勇氣はない。王は自ら立てた誓いの言葉

に拘束され、后を引き渡すことになる。その後、狩りから帰ってきたトリスタンが、追跡の後、イズーを奪い返す。宮廷に引き返す前に二人はしばし水入らずの時を楽しむが、結局宮廷に戻り、トリスタンはマルク王が后を簡単に手放したことで彼を非難した後、その手にイズーを返す。

以上の一致を除くと、両テキストは次のような根本的相違を示す。まず、トマにおいてはアイルランドからやってきた騎士がハーブの演奏の代償としてイズーを騙し取り、トリスタンはロート弾きに扮してこの誘拐者に近づき油断させておいてイズーを奪い返すのに対して、『散文』では楽器はまったく使用されず、事件の解決にはトリスタンとパラメードの剣による一騎打ちが置かれている。次に、トマの物語において「ハーブとロート」が前後のエピソードから完全に独立したものであるのに対して、『散文』は「イズー誘拐」を先行する「ブランジェン」の延長上に置き、二つで一つの物語を作っている。また付言しておけば、アイルランドの騎士がこのエピソード限りで二度と登場しないのに対して、パラメードはあるいは冒険を求める遍歴の騎士として、あるいはイズーに思い焦がれる人物として、今後も幾度となく姿を現わす。

我々は『散文』の「イズー誘拐」とトマの「ハーブとロート」とを比較してみたが、これは両エピソードが相当するものとするレーゼットとベディエの見解を踏襲するためではない。この点については、逆に、『散文』はペルールが語っていた「イズー誘拐」に依拠したと見るのが今日の定説である。ペルールの該当部分は失われて残っていない。また、同じ流布本に属するアイルハルトの物語は完全な形で残っているものの、問題のエピソードは全然語っていない。そのために、間接的にはあるがエピソードの異同を提示したのである。

ところが、この点に関して『道化のトリスタン』<sup>5)</sup>の二つの版が貴重な証言を残している。レーゼット及びベディエの指摘以前に、既にリュトスラフスキーは、オックスフォード本『道化』に要約されている「ハーブとロート」と、それに対応するものとしてベルン本『道化』の一節を挙げていた。<sup>6)</sup>ベルン本『道化』のこの一節で、道化を装ったトリスタンは彼に気づかぬイズーに次のように語る。<sup>7)</sup>

お忘れのようですね、Gamarien のことを、  
彼奴は、ほかならぬ

貴方御自身を望み、攫っていったのです。

誰が貴方を救ったというのでしょうか。

——確かに、王の甥御トリスタンです。

380

...

——私はその者に似てはいませんか、

一人、誰の助けもなく、

あの窮地に貴方を救い、

390

Guimarant の腕を切り落したその者に。

ベルン本『道化』とベルールとの関係を綿密に考察したヘフナーは、上の暗示的一節を「イズー誘拐」への言及と特定し、そこに激しい一騎打ちを窺わせる記述が見られること、また逆に音楽の要素がまったく存在しないことに『散文』との一致を認めた。そして彼は、『散文』とベルン本『道化』の共通のモデルとして今は失われたベルールの「イズー誘拐」を考え、これをエピソードの原型とし、「ハーブとロート」はトマがこの原型を作り変えて生れたものだと結論した<sup>8)</sup>。ヘフナーの見解は、その後「イズー誘拐」に言及するクリュゼル、<sup>9)</sup>ボームガルトネル等によっても支持されている。<sup>10)</sup>

ヘフナーは上に訳出した部分をのみ「イズー誘拐」に相当するものと考えた。これに対してデルブイユは、それに続く 395 - 403 行もこのエピソードに関するものと解釈し、特に 395 行（「かつて私は貴方のハーブ弾きでした」）に注目してベルールの「イズー誘拐」にも音楽の要素が存在していたとして次のように述べている。

トマはトリスタンと誘拐者との決闘を捨て、一方『散文』は恐らく音楽試合を除いた。とにかくトリスタンが演奏して恋人を慰める場面だけは除去してしまつた。それに、『道化』がトリスタンをイズーのハーブ弾きにしている事実は、恐らくアイルランド人の誘拐者がロートによってではなく、剣とハーブの両方によって打ち負かされたことを示す。（p. 278 - 279）

デルブイユのこの見解に関して、我々は『散文』のその後の展開に思いがけない資料を見出す。イズーに裏切られたと誤解したトリスタンは、森をさ迷っ

た果てに、かつてイゾーのためにパラメードと闘った塔の前にやってくる。その塔はマルク王のもとに帰る前にトリスタンとイゾーが数日を過した所でもあった。二人の恋人のその後の消息を知るためパラメードが派遣してきた娘が、トリスタンを追ってきてこの塔に泊ることになり、そこで一本のハープを発見する。そのハープは、イゾーと共に過した時にトリスタンが残していったものにほかならないことがわかる。娘はこのハープで、トリスタン自身が作ったものという三つのレー〈Lai〉を弾いて彼の心を慰める。(カーティス版Ⅲ, §§ 864 - 869)

『散文』の「イゾー誘拐」には音楽に係わるようなものは一切用いられていなかった。しかし、ベルールの原型に存在し『散文』が何らかの理由で除去してしまったハープが場所を変えてここに現われたと考えることは可能である。そうだとすれば、原型においてはトリスタンはイゾー救出にハープを持参したことになる。そして、剣による一騎打ちのためにハープを持ち出すことはありえないことを考えると、デルブイユの言うように原型には「音楽試合」のごときものが語られていたことになろう。

パラメードの第一のエピソード「ランドの野試合」は、そのクロノロジー上の位置関係と物語の性質において、「イゾー誘拐」の場合とは違っかなり込み入った状況にある。下の表を見てみよう。

	伝統的トリスタン物語 (流布本, 騎士道本)	『散文トリスタン』
最初のアイル ランド訪問	傷 の 看 護	傷 の 看 護
	↓                      ↓	ランドの野試合  入 浴 (トリスタンの素姓発覚)
第二のアイル ランド訪問	電退治 (家令の企み)	決 闘 裁 判
	入 浴	

アイルランドに漂着したトリスタンがその地で傷の看護を受けるところまでは『散文』は伝統的トリスタン物語に従っている。ところがそれ以後『散文』が大幅に変更を加えていることは上の表を見れば一目瞭然である。「ランドの野試合」に相当するものは伝統的トリスタン物語にはない。トリスタンの素姓発覚につながる入浴の場面は第二のアイルランド訪問から第一のそれに移し換えられている。また、表で見る限りでは、『散文』の「決闘裁判」に対応するのは「竜退治」である。

ボームガルトネルはこの「決闘裁判」と「竜退治」を対応させて次のように言っている。

散文作者は(…)竜との闘いを削除し決闘裁判をその代わりに置くことによって、イザー探求のエピソードの展開を改変した。トリスタンはアイルランド王の代理騎士としてバン王の一族の騎士と闘い、その勝利の代償としてイザーを受け取るのである。(p. 113)

確かに、「勝利の代償としてイザーを受け取る」という目的をトリスタンに果させることにおいて『散文』の「決闘裁判」は伝統的トリスタン物語の「竜退治」に対応し、それに取って代わるものである。

ところが、ボームガルトネルの研究以前に、デルブイユは我々にとって見逃せない極めて興味深い指摘を行なっている。<sup>11)</sup>それは、先に取り扱った「イザー誘拐」における誘拐者(トマにおけるアイルランドのハーブ弾き、ベルン本『道化』における≪Gamarien-Guimarant≫)が、「竜退治」のエピソードに登場し、トリスタンの手柄を掠め取ってイザーを我物にしようとする家令と同一人物であるとの指摘である。デルブイユはこの考えを可能にするものとして『散文』を援用し次の二点を挙げる。

(1) 『散文』の「野試合」におけるパラメードの役割は「竜退治」における家令のそれに対応し、しかもパラメードは『散文』の「イザー誘拐」の主人公でもある。

(2) 『散文』の異種本であるパリ国立図書館103写本に挿入されている「竜退治」で、家令が≪Agynguerren le Roux≫と名指され、この名が<sup>12)</sup>

ベルン本『道化』における誘拐者 ≪Gamarien – Guimarant≫<sup>(13)</sup>に通ずる。

デルプイユが言うように家令とイズー誘拐者とが同一人物であるかどうかはテキストを読む限りでは不確かである。確かに、二人ともアイルランドの生れでありイズーに想いを寄せる人物であることでは共通しているが、少なくとも騎士道本は二人を同一人物とは書いていないし、むしろ別の人物として扱っている印象をさえ与える。流布本はこの問題に関してまったく役立たない。しかし、デルプイユにならって103写本の家令 ≪Aguynguerren≫ がベルン本『道化』の誘拐者 ≪Gamarien–Guimarant≫ に遡るものと考えるならば、ベルールの失われた部分において家令と誘拐者とは同じ人物であった、少なくとも同じイメージを抱かせる人物であった、と言うことはできよう。この同一性が『散文』の作者をして二人の（または一人の）伝統的登場人物の代わりにパラメードという一人の人物を置かせたと考えれば、『散文』の「野試合」は伝統的トリスタン物語の「竜退治」に対応し、それに取って代わるものということになる。

この考えに対立するのが、ボームガルトネルが指摘している「竜退治」と「決闘裁判」の対応である。本来「竜退治」は第二のアイルランド訪問の部分で語られているのに反し、『散文』の「野試合」は第一の訪問に置かれている。クロノロジーの点から見れば、『散文』において「竜退治」に対応すべきは「野試合」ではなく、ボームガルトネルが言うように、「決闘裁判」であろう。しかし、そのように両テキストの並列的関係に目を奪われると、一つの重要な事実を見落すことになる。伝統的トリスタン物語において「竜退治」は、「入浴」から「トリスタンの素姓発覚」へと繋がり、「和解」で閉じられるが、実は『散文』の「野試合」もまた同様の展開と終止を見るのである。つまり、我々には、第二のアイルランド訪問における「竜退治」－「入浴」－「発覚」－「和解」の本来のシーケンスが、『散文』では「野試合」－「入浴」－「発覚」－「和解」のシーケンスとして第一の訪問中にそっくり移し換えられていると思えるのである。この両シーケンスの対応を見ても、『散文』の「野試合」は「竜退治」に取って代わるものと言うことができよう。

結論的に言えば、『散文』の作者は「竜退治」の家令の代わりにパラメードという独自の登場人物を置き、そしてもとのエピソードを「野試合」というまったく性質の異なるものに作り変えたのである。ただしその際作者は「竜退治」



から幾つの特徴を採用して「野試合」の中に残している。例えば、「竜退治」において退治者に褒賞としてイズーが約束されているのと同様に、『散文』において野試合の勝者はランド城の跡継ぎ娘を娶ることができる。また、「竜退治」に登場するイズーの従者ペリニスの名が、「野試合」においてブランジェンの二人の兄弟の一人に用いられている<sup>14)</sup>。特に、このペリニスという登場人物は、騎士道本には見られず、流布本に固有のものであることから、ここにも『散文』と流布本の対応を見てとることができる。

では何故『散文』は「野試合」を第一のアイランド訪問の部分に持ってきたのか。これは結果から見て次のように考えることで容易に理解されよう。将来トリスタンの宿命の敵対者となり、イズーの誘拐をも試みることになるパラメードを、作者はまさにトリスタンとイズーの最初の出会いの場に投入したかったのである。それだけでなく、作者はこのパラメードを利用してトリスタン物語の伝統に新しい愛の形態を付け加えている。野試合の勝者として、またイズーの騎士となることを欲する最初の人物としてパラメードは主人公トリスタンに先んじており、トリスタンがイズーを恋愛の対象として意識するのもパラメードに触発されてのことである。ここには愛というものに対する作者の現実的見方が反映されており、この現実主義を敷衍して考えれば、架空の動物である竜の物語が見捨てられた理由もまたここに求めることができよう。

本論において我々は、パラメードという共通因子でくくられる『散文トリスタン』中の二つのエピソードが韻文トリスタン物語に対しどのような対応をしているかを見てきた。それによって我々は、本論の限られた範囲では十分な検討ができなかったものの、『散文』と流布本の対応を改めて確認し、さらに『散文』がパラメードという新しい登場人物を導入した意図の一端にも触れえたように思う。パラメードは、半ば独立的に存在するエピソードとエピソードを一貫した動機で結びつけ、トリスタンとイズーという物語の軸を支える新たな支柱として、作品に重層性を付与するのに役立っており、その意味において『散文トリスタン』がその物語の中にそれを構成する小エピソードを如何に統合してゆくかを考えさせる一例となっているのである。

## 使用テキストと参考文献

- R. L. CURTIS (éd.), *Le roman de Tristan en prose*, t.I, 1963, München, Max Hueber Verlag (1985, Cambridge, D. S. Brewer); t.II, 1976, Leiden, E. J. Brill (1985, Cambridge, D. S. Brewer); t.III, 1985, Cambridge, D. S. Brewer.
- E. LÖSETH, *Le Roman en prose de Tristan*, 1889, Paris, Bibliothèque de l'École pratique des Hautes Etudes, (1974, Slatkine Reprints).
- J. BIEDER, *Le roman de Tristan par Thomas*, 2 vols, 1902 & 1905, Paris, (S. A. T. F.).
- E. HOEPPFNER (éd.), *La Folie Tristan de Berne*, Paris, 2<sup>e</sup> éd., 1943, (*Publications de la Faculté des Lettres de Strasbourg*).
- W. LUTOSLAWSKI, *Les Folies de Tristan in Romania*, t.XV, 1885, pp. 511–533.
- E. HOEPPFNER, *Das Verhältnis der Berner «Folie Tristan» zu Berols Tristandichtung in Zeitschrift für romanische Philologie*, t.XXXIX, 1917–19, pp. 62–82.
- I. CLUZEL, *La reine Iseut et le harpeur d'Irlande in Bulletin Bibliographique de la Société Internationale Arthurienne*, t.X, 1958, pp. 87–98.
- M. DELBOUILLE, *Le premier «Roman de Tristan» in Cahiers de Civilisation Médiévale*, t.V, 1962, pp. 273–286 & pp. 419–435.
- E. BAUMGARTNER, *Le «Tristan en prose», essai d'interprétation d'un roman médiéval*, 1975, Genève, Droz.

## 註

1) トリスタン伝説の二つの系統本 (流布本 ≪version commune≫ と騎士道本 ≪version courtoise≫ の各々に属する作家または作品は次のごとくである。

流布本: ベルール, アイルハルト・フォン・オーベルク, ベルン本『道化のトリスタン』

騎士道本: トマ, ゴットフリート・フォン・シュトラズブルク, オックスフォード本『道化のトリスタン』 etc.

なお本論が対象とする二つのエピソードに対応する部分はトマの物語においてもベルールの物語においても残存していない。トマに関してはベデイエによって復元されたものを参照する。

2)ここで予告されている出来事は作品の終り近くで実際に語られる。Cf. LÖSETH, §507.

3) LÖSETH, p. XXVI.

4) BIEDER, t.II, p. 244.

5)トリスタン物語の一部を拡大してできた小品。まずベルールを基にしてベルン本『道化』が誕生し、その後これを模倣し、今度はトマをモデルにしたオックスフォード本『道化』が作られた。

6) LUTOSLAWSKI, p. 517.

7) Po vos manbre de Gamarien,  
Qui ne demandoit autre rien  
380 Fors vostre cors qu'il en mena:  
Qui fu ce qui vos delivra?  
— Certes, Tristans, li niés lo roi,  
Qui molt fu de riche conroi. ))  
Voit la Tristans, mout li est buen:  
385 Bien set que il avra do suen  
S'amor, car plus ne li demande;  
Sovant en a esté en grande.  
( ( Resanble je point a celui  
Qui, sol, sanz aïe d'autrui,  
390 Vos securut a cel besoin,  
A Guimarant copa lo poin?  
— Oil, itant que estes home.  
Ne vos conois, ce est la some.  
— Certes, dame, c'est grant dolor.  
395 Ja fui je vostre harpeor  
En la chambre del jiu menistre,  
Tele ore que je fui molt triste  
Et vos, raïne, encor un poi;  
Car de la plaie que je oi,  
400 Que il me fist par mi l'espaule,  
Si issi je de ceste aule,  
Me randistes et sauf et sain,  
Autres de vos n'i mist la main. (Ed. E. HOEPFFNER,)

この一節はかなり難解で内容も暗示的であるため、研究者の間でも解釈は一樣ではない。デルブイユは378－403行のすべてを「イズー誘拐」に係わるものと解釈している。他方ヘフナーは319行までを「イズー誘拐」の言及と見なし、395行以下はトリスタンがモルオーから受けた傷をイズーが手当した場面に対応するものとする。この解釈によると、400行の《il》はモルオーを指すことになるが、モルオーの名が上に挙がっていない以上、我々としては《il》が《Gamarien-Guimarant》を受けているものと考えざるを得ない。

《Gamarien》及び《Guimarant》は、語形は異なるものの、同一人物のヴァリエーションを見ることで研究者の見解は一致している。

8) HOEPPFNER, pp. 74-77.

9) CLUZEL, pp. 94-96.

10) BAUMGARTNER, pp. 107-109.

11) DELBOUILLE, pp. 279-282.

12) この写本（15世紀）は、伝統的トリスタン物語に極めて忠実な、しかし通常の『散文トリスタン物語』には採用されていない二つのエピソード（「竜退治」と「トリスタンの死」）を取り入れている。この二つのエピソードは勿論改作者が挿入したものである。Cf. BAUMGARTNER, pp. 77-83.

なお、この写本の「竜退治」は「野試合」と「入浴」の間に置かれている。

13) トマもアイルハルトも家令に名を与えていない。アイルランドのハーブ弾きにゴットフリートは《Gandin》の名を与えている。Cf. BÉDIER, t.I, p. 168 & t.II, p. 219.

14) ブランジェンは、トリスタンを野試合に参加させるため、彼の従者として二人の兄弟《Perynins》と《Mathael》（カーティス版、§ 332）を提供する。この《Perynins》の名は、レーゼット（p. 23）が列挙したヴァリエーション《Perym, Pernim(n), Puin, Perinis, Pernus, ...》を見ても、かなり揺れているが、以下の事情で流布本のペリニスに対応するものと考えられる。アイルハルトによると、イズーは、ペリニスとブランジェンを伴って殺された竜を見に行き、半死のトリスタンを発見するが、103 写本の「竜退治」は、この場面にイズーの母を加えるほかに、ペリニスとブランジェンに代えて《Perinis》と《Mathanael》を同行させる。Cf. BÉDIER, t.II, p. 220 & pp. 333.